

動いたからこそ分かること



5月31日、青年会本部より宇恵道明委員をお迎えして、芦津分会総会を開催。
全国から多くの会員が集まった。

真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

働けば働くだけ、めん／＼心に誠さえあれば踏み損い(て)は無い。これ論(ろん)したら分かるやろう。働いたら働いた(だけ)、これから見えるのや。

明治30年12月23日 おさしづ

大正14年、二代真柱様が青年会長に就任されると、青年会は外国語学校、図書館、印刷所を設立し、海外布教の人材育成と文書布教の体制を整えました。そして若きあらしきとよりようたちが積極的に海外に出て、やがて満州へ移民開拓団を派遣するまでになりましたが、戦争によって青年会の壮大な海外布教事業は、一度は頓挫してしまいました。

後年、二代真柱様は「われわれの心の未熟さから、単に学校を作り、印刷機を備えたならば、それで海外へ道がつくものと、その用意ができたものと考えた心の甘さといえますものを、お知らせいただいた」と語られました。そうしたことから青年会は、求道、伏せ込みの場としてひのきしん隊を発足させるなど、その後の会活動に反省を活かしています。

結果がうまく出ず、たとえ失敗と言われても、自らの行動によって得た経験は、本人にとつてかけがえのない、将来のおたすけの糧となるでしょう。しかしそれは、自分で動いたから分かったこと。AIが瞬時に答えを教えてくれる時代だからこそ、たとえ遠回りと思えても、自らの行動で得た答えや経験を人だすけに繋げられるよう、勇んで教えの実践に励みましょう。

四方正面

「根出しのよい方へは枝が栄える」
明治29年10月10日
というお言葉がある。全ての植物には根があり、根は目に見えないが、しっかりと伸びるほど成長する。

「伏せ込み」という言葉を聞かれたことはあるだろうか。おちばや大教会、上級教会で伏せ込み、と聞く。お屋敷で伏せ込まれた方と言えば、本席・飯降伊蔵先生である。褒められることなく、多くを語らず、黙々とお屋敷の御用をされた。奥さんの産後の思いをたすけていただいた感謝の心からの行動だと思われる。伏せ込みは、誰から見られていなくても、自ら進んでさせていただくことが大切。日頃の生活の中でできる伏せ込みの一つとして挙げられるのが、身をもって行うひのきしんではないだろうか。黙々と感謝の心で、ひのきしんに励みたい。

(義)

《5月月次祭 挨拶》

ようぼくは道の先達

大教会長 井筒梅夫

皆様方には日頃からお道の信仰にお励みくださり、たすけ一条にご丹精くださいませと、誠にご苦勞様でございます。只今は5月の月次祭を、共に勇んで勤めさせていただきましたことは、大変ありがたい次第です。月次祭にあたって、思うところをお話しして、ご挨拶と致します。

さて、3月の月次祭と同様に、『徒然草』の中の逸話に興味深い話がありますので、一つを取り上げて話題にしたいと思います。京都に真言宗御室派の総本山で、皇室ともゆかりの深い仁和寺というお寺があります。このお寺にいたある僧侶は、老年になるまで日本三大八幡宮の一つである石清水八幡宮に参拝したことがありませんでした。我ながらに情けないと思ったその僧侶は、ある時一大決心をし、たった一人で徒歩で参拝に出かけます。石清水八幡宮は山の頂上にあるのですが、そうとは知らずに、麓の極楽寺と高良神社を、それと勘違いをして、ここだけを参拝したのです。ところが近くの山道を先達と呼ばれる案内人が、八幡宮を目指して大勢の人を連れて登っていく姿を見たこの僧侶は、石清水八幡宮に参拝して、その上でどうして山登りをするんだらうと、いぶかしく思いながら仁和寺に戻りました。

そして同僚の僧侶たちに、「長年心にかけていた参拝を果たしま

した。八幡宮は噂で聞いた以上に莊嚴な境内でした。それにしても参詣者がみな山に登ったのは何があったのでしょうか。私は山の見物に来たのではなく、八幡宮の参拝が目的でしたから、山には登りませんでした」と、生真面目に話をしたという逸話です。たぶん同僚の僧侶たちは「あんなに遠いところまで歩いて行っただのに、お気の毒様なことや」と思ったに違いありません。この逸話は、よく下調べもせず、知ったつもりで事に当たれば大変な目に遭うのだという教訓の一つです。

これを別の角度から眺めて注目したいことがあります。この逸話は、「少しのことにも、先達はあらまほしき事なり」の一文で締め括られています。これはちよつとしたことでも先達である案内人はいたほうが失敗は避けられ、事は順調に運ぶという意味です。つまり、先達の大切さです。

芦津の梅治郎初代様は、入信前は大峰山信仰の先達の役を務めていましたが、入信してからは道の先達として、大勢の人々をこの道へと導きました。私たちようぼくも道の先達です。人々をたすかる道へと導く案内人です。

私たちの身近には、身上や事情など困難をかこつ方や、人知れず悩みを抱えている方はおられると思います。そうした人に自分なりに手を差し伸べて、悩みに耳を傾け、その人のたすかりを願って、おちばを案内させていただく。ちばの理を戴く教会へ案内させていただく。そして真実の教えに触れていただけのように、苦心をすることが先達をもって任ずるようぼくの大切な役目だと思えます。これを忘れずに、にをいがけ、おたすけに勇んで励ませていただきたいものです。

先ほどは少年会本部の矢追先生から、子供に信仰を伝えるため

の大切な3つのポイントを聞かせていただきました。子弟にとっても私たちは先達であらねばいけないと思います。案内人は先頭に立って、道を間違わないように、道に迷わないようにと心を使って、慎重に連れて通る役目があります。ですから、まず先達である私たちが、この道を一筋に勇んで歩むことが肝心です。

そして子弟には、常日頃から心を掛けて、旬々折々には声を掛けて、後にちゃんと続いてくれるように、信仰することのありがたさ、この道の素晴らしさを映し伝えることに努力を重ねていきたいと思えます。お道が目指す次の成人の塚である教祖百五十年祭、その翌年の立教二百年には、大勢の若い人たちが生き生きと信仰し、大いに活躍できる姿を御守護いただけるように、心を掛けてしっかりと縦の伝道につとめさせていただきますでしょう。

月末は青年会の総会があります。すべては声を掛けることから始まります。対象者に総会の声を掛けるといふことも大切な縦の伝道ですから、大いに声掛けに励んでいただきたいと思えます。

さらに来月は、島村廣義世話人先生のご巡教を頂くこととなっています。おちばからのお声を聞かせていただく大切な巡教であると心得ていただいて、どうぞ来月も声を掛け合い、誘い合っつて、月次祭にご参拝くださることをお願いして、ご挨拶とさせていただきます。

(要約)

芦津大教会創立140周年記念祭 七代会長就任奉告祭

立教192年(令和11年)4月22日執行

立教百八十九年 五月月次祭祭文

この神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には世界一れつをたすけたいとの深い思召から、日に月に温かき御恵をお垂れ下され、大難を小難に小難を無難に御守護頂きまして、陽気ぐらしへとお導き下さいます親心の程は、誠に有り難き限りでございます。私共は、片時も御厚恩を忘れることなく、たすけ一条の道のために真心を尽くして努めさせて頂いておりましたが、その中にも今日の吉日は、おちばよりこれの教会にお許しを頂きました尊き日柄でございますので、御前に参らせて頂きました教会長、ようばく、信者と相共に、日頃賜る御守護に言改めて御礼申し上げ、只今から奏でる鳴物に調子を合わせ、心晴れやかに座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、五月の月次祭を執り行わせて頂きます。何卒、一同のおつとめに心勇む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下され、たすけ一条の道の一層の進展をお見せ頂きますようお願い申し上げます。

さて、教祖の年祭を勤め終え、次の成人の塚に向けて心を揃えてたすけ一条に踏み出させて頂くごと、直属、部内へと順次巡教を実施致しております。芦津に繋がる一同は、仕切り直しの気持ちも新たに、にいがけ・おたすけに、丹精・育成に、そして理づくりと徳積みに励ませて頂いて、成人の歩みを一手一つに進めさせて頂く所存でございます。

また、今月は神殿講話において「縦の伝道講習会」を開催致しますが、末代栄える道の御守護を頂けるよう、次代を担う道の子弟の育成に心を尽くさせて頂きたく存じます。

何卒、一同の道の上に尽くす誠実を大らかな御心にお受け取り下さいまして、銘々の心の成人をお導き下され、お預かりする各々の名称の理を足場に御教えの理が伸び栄えて、陽気ぐらしの世界に向かうたすけ一条の道を、心勇んで歩ませて頂けますようお連れ通りの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《5月月次祭神殿講話 縦の伝道講習会》

先永う楽しんで 感謝と喜び心を子供に伝えよう

少年会本部委員 矢追雄蔵先生

育成者の心が

子供の心を育てる

本日は、「縦の伝道」について、
私自身が日頃感じさせていた
ていることを、3つにまとめてお
話します。

1つ目は、「育成者の心が子供の
心を育てる」ということです。ま
ず育成者の心の前提となる話を、
私の不思議な体験からお伝えしま
す。

今から20年前、私が20歳ぐら
いの頃に青年会本部の「直属幹部練
成会」があり、訳も分からぬまま、
言われて参加しました。何も分か
らないので何の発言もできず、大
きな分会や勇んだ分会の活動内容

を聞かされて、そのギャップに驚
き、打ちのめされたのです。

自分や自分会は何もできていな
い、こんなことでいいのか、一体
どうしたらいいんだろうと、相当
悩みました。参加したことを後悔
し、もう2度と行きたくないと、
考えれば考えるほど最悪な気分で、
その日は眠りました。

すると、その夜に夢を見たので
す。薄暗い我が家の一室に私がい
ると、突然部屋の襖が開いてある
男性が入って来られ、「どうしたん
や」と声を掛けてくださいました。
私が事情を説明すると、その方は
力強く、はっきりと「神様を思う
心をしっかり持つといたら、大丈
夫や！」と一喝し、そのひと言で

夢は終わりました。

自分は神様のことを忘れ、手段、
方法ばかりを考えていました。親
神様は何を望んでおられるのか、
教祖に導いていただこうなんて何
にも考えてなかったことに、目が
覚めてすぐ気付き、昨夜の悩みや
不安、不満は嘘のように一気に吹
き飛んでいったのです。

その男性が、実は芦津の五代会
長・井筒敏夫先生だったのです。
私が生まれた昭和59年9月12日の
翌日、9月13日に井筒敏夫先生は
お出直しになられたとお聞きして
います。ですから私は、お会いし
たことも、声を聞いたこともあり
ません。なのに、迷える私を救う
ため、わざわざ夢に出てきてくだ
さったのです。

どのよふなゆめをみるのもみな月日
まことみるのもみな月日やで

十二号 163

とのおふでさきの一節を考えると、
神様が私に夢を通して教えてくだ
さった。私の心を強く切り替える
ことができたのも、井筒先生の不

思議な夢のおかげだったのです。
忘れもしない私の大事な大事な夢
の1つです。

私はこの夢を通して、われわれ
は何をするかということ以上に、
どんな心で通るかが大切なんだと
いうことを感じました。

子供に「何を教えるか」以上に、
「そもそも周囲の大人がどう物事
を受け止めているか」が子供に伝
わっていると思うのです。動揺す
れば動揺が、喜びば喜びがそのま
ま子供に伝わる。大人の自身がそ
のまま子供に映っていく、と言っ
ても過言ではないと思います。

どう喜びを見出すか

私の母が昔、よく話してくれた
ことがあります。母が小さい頃、
母の教会で預かっていた人が、お
米を水ではなく、間違って灯油で
といでしまったことがありました。
祖母が慌てて何度も洗い直してご
飯を炊いたのですが、灯油の匂い
は全然取れていなかったそうです。
ところが祖母は、そのご飯を食べ



ながら、「おいしいねえ」と、ニコニコして食べていた。すると母も、「母親が言うからそういうものなのかな」と思って食べていた、と言うのです。

子供の頃、その話を聞いていた私は、「おいしいねって言われたからって、おいしくなるわけないだろう」と思っていたのですが、大人になってからその意味が少し分かった気がしたのです。

なぜかという、教祖百四十年祭の直前に、こんなことがあります。

奈良教区で、教祖殿北庭の落ち葉清掃のひのきしんがあつたとき、

「なかなかできる場所じゃないから、皆に声を掛けてください」ということで、教会で人集めのために呼び掛けていました。

ところが開催日前夜になって急に「治道大教会は別の場所で」と、教祖殿すら見えない場所へ、現場変更の連絡が来たのです。私は全然構わないのですが、「信者の皆さんは不足されないだろうか？ 何と伝えようか」と1人で心配していました。

当日の朝、父にその話をすると、父は「そうか、それは良かったな。他の教会の人に行ってもらえたら、それで結構や。よし、そしたら自分も行くわ」と言ったのです。父は最近足も痛いし、そういう所へはあまり出たがらない人なので、そう言ったのが驚きだったのです。私が、私はそのとき「そういう受け止め方でいいんだな」と、妙に得心がいったのです。

父のせいにするわけではないのですが、もし父が不足を言っていたら、私もまた一緒になって怒っ

ていたかもしれません。けれども、身近な人から前向きで不足のない喜びの言葉を聞くと、人はその影響を受けるのです。大人になっても、人は周囲の影響、特に身近な存在からの影響を受けながら生きていくのだと、改めて思いました。

だからこそ、困ったときにどう喜びを見い出すか、どう前向きに通るかを、育成に当たる大人が日頃から、相手が大人であろうが、子供であろうが、教え示していくことが大切です。一緒にご飯を食べ、「おいしいね」と言ったり、映画を見て「おもしろかったね」と語り合う。そういう何気ないやり取りの中で、子供たちは、「楽しんでいいんだ」「喜んでいいんだ」ということを学んでいくのだと思います。

こうした些細な行い、日頃からの心掛けによって親神様の存在と御守護が身近なものになり、いずれは神様を芯に据えた判断ができるようになっていくのだと思います。

自分も役に立っている

最近読んだ『大人の育て方』という書籍の中で、とても興味深い内容がありました。

幼少期に、食事の準備や掃除、洗濯などの家事を手伝った子供は、大人になってから仕事で高い成果を出す傾向があるというのです。

子供に家事をさせるともたもたするし、かえって時間がかかるし、散らかるし、こちらの手間も増えます。しかしその中で子供は、「自分も家族の役に立っている」という感覚を育んでいくのだというのです。

技術が身に付くから将来的に出世しやすさという意味ではなくて、子供の内面、特に人との対応能力や自立心といったものが自然と身に付くからだそうです。

これは家庭内だけでなく、教会内でも同じですよ。時間がかかってもいい。失敗してもいい。完璧じゃなくてもいい。子供たちに御用をしてもらう。

例えば掃除をする。配り物をする。お茶を運ぶ。「今日の直会は子供たちが作りました!」ということも面白いかもしれません。「なんだ、この味は!」となるかもしれないけれど、それでもいいと思います。

そういう経験の中で、「私も皆の役に立っている」という感覚が芽生えていくのです。時間もかかるし手間もかかる。すぐに結果は出ない。しかし将来、大人になったとき、きつと良い成果が現れてくると思うのです。

私は、ここにも縦の伝道のヒントと、やりがいがあるように思います。

教祖は、家族や子供たちに対して、言葉と行いを通して喜び方を教え示されました。お米を炊くのも娘様の御用だったのでしょうか。お米が無いと言えば、「水を飲めば水の味がする」と仰せられました。またお月様の明かりを喜んで、糸紡ぎもご家族で一緒になされ、をびや許して我が子もたすけ、導

かれました。

親から子へ言葉で、行いで、喜び方を伝えていかれたのが教祖のひながたなのです。

人間の成長を喜んでくださる

縦の伝道で私を感じていることの2つ目は、「親神様は、私たち人間の成長を何より喜んでくださる」ということです。

子供が親を思う以上に、親は子供に愛情、親心を持つものですが、それと共に、親は子供の成長した姿を見ることが何より嬉しいものです。それを痛感した出来事がありました。

ある月の月次祭の前日、自宅へ

戻ると、当時小学5年生と4年生の子供たちが、「お父さん、いつもありがとう」と言っていて、プレゼントをくれたのです。聞けば、自分たちのお小遣いを貯めて、移動スパーで買った、マグロのお刺身とヤクルトでした。初めてのことで驚きと嬉しさでいっぱいでしたが、私はマグロやヤクルトが嬉し

かったのではなく、その心がたまらなく嬉しかったのです。

おふでさきに、
にんけんも共かわいであるをがな
それをふもをてしやんしてくれ

十四号 34

とあります。

人間の親でさえそうなのですから、親神様は私たちが思っている以上に、私たちの成人を喜んでくださっているに違いありません。ですから、道の子を育てる取り組みに一生懸命に、また少しでも励んでいる方があれば、神様はその姿勢、心、行いをお受け取りくださり、お喜びくださっているということなのです。

しかし、無理しすぎては駄目です。真面目に一生懸命頑張るのも大事ですが、しんどいときには、親神様、教祖に甘え切ったらいと思っけています。「もう無理です」助けてください「お守りください」そう言って教祖に抱きつきに行ったらいいと思います。人はいつもそうしています。人

のたすかりを願うことはもちろんのこと、自分や家族のことも遠慮なく相談しています。すると不思議と心が軽くなり、安心できるのです。

それはなぜか? きつと教祖は「まだまだ子供やなあ」と抱きしめてくださっているのだと思うのです。

子供が可愛くない親なんていないでしょう。抱きついたら、教祖ならきつと抱き返してください。しんどいときは子供らしく、しっかり甘えたらいい。凭れ切るでもいい。

それがわれわれ人間だからできる、もう一つの子供らしい姿だと思っけています。

人のために動く姿

以前、子供2人と共に、熊本から奈良まで帰る道中の、新幹線の中での出来事です。

車内は大混雑で、当時小学4年生と3年生の子供だけ何とか座れました。そこへ赤ちゃんをおんぶ

して、小さな子供を連れ来たあるお母さんが入って来られたのですが、席がなく、近くで立っておられました。すると我が子がスッと立ち上がり、そのお母さんに席を譲ろうと声を掛けたのです。結局、その方は遠慮されたのですが、その姿を見て、私は涙が出るほど嬉しかったのです。

子供たちは、恥ずかしかったし勇気も要ったと思います。けれども、「人のために」と動こうとした、その心が尊かったのです。

少年会の「ひのきしん」の歌に、
戸おばさん赤ちゃん重いでしょう
どうぞこちらへおかけなさい
わたしら道の子 教会で
ならっておぼえたひのきしん

戸だれでもこまったその時は
人のしんせつ身にしてみる
たがいになんぎ不自由を
たすけ合うのがひのきしん
という歌詞があります。

人のために動くこうとする姿は、人の心を打ちます。あのお母さんも、それまで暗い表情だったのが、

声を掛けられてから、ずっと笑顔になっておられました。

人の親でも子供の成人が嬉しいのですから、育成に携わる皆さんが、「子供たちのために」と丹精されていく日頃の姿を、親神様、教祖は必ずお喜びくださっていると思うのです。

育成にはどうしても時間も手間もかかります。結果はすぐに現れませんが、どうか根気強く、その真実の心をこれからも積み重ねてくださいますようお願いいたします。

先を楽しむに通る

縦の伝道で私を感じていることの3つ目は、「先を楽しむに通る」ということです。

皆さん、最近楽しんでおられるでしょうか。実は私、一時期精神的にしんどくなることがありました。そのとき、私を救ってくれた人が2人いるのですが、その1人が中山大亮様でした。

大亮様の「雄蔵さん、最近楽しんでますか？」とのひと言で、暗

闇に一筋の光が差し込み、どん底から救われ、心の底から気持ちータすけられました。苦しい状況は何も変わらないのですが、私の気持ちが変わりました。「そうか、この状況を楽しんだらいいんだ」と気付くことができ、それからというものの、途端に心が軽くなったのです。その日を境に180度、毎日に楽しさを感じるようになりました。

嫌なことから逃げて、楽しいことをしましように、と言っているのではありません。私が言いたいの嫌なことや辛いことでも、心の持ち方一つで「苦しみを楽しみに変えることもできる」「少しでも喜ぶことができる」ということです。難しいですが、要は「あるがままの状態を味わう、楽しむ」ことです。そういうことを、大亮様のひと言から教えていただいた気がしたのでした。

しかし実際は、楽しむ、喜ぶことは難しいですね。どうしたらいいのでしょうか。

教祖は、

世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで。この道は、先永う楽しんで通る道や程に。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』

135 「皆丸い心で」

と仰せられました。

このお話は、「葡萄のようになあ、心で繋がる」ということ以外にも、葡萄のように「先を楽しむ」ことも合わせて教えられていると、私は推察します。

葡萄の実は、枝側は甘いのですが、房の先端は時間が経つと共に、だんだんと熟していく、という特性があります。ですから「今は酸っぱいけれども、もう少し時間が経てば先端の方も甘くなるかな、楽しみななあ」と、先を楽しむにして今を過ごすことが、葡萄の楽しみ方の一つといえます。

このように、後になつたらきつと良いことがあると思えたら、辛い今を乗り越えやすいのです。どう考えても今喜べない、楽しめない

かつたら、仰せの通り、先を楽しんで今を過ごせば良い。それが喜び方のヒントです。

「この道は、先長く楽しんで通る道なんだよ」とは、何とも素敵な心の持ち方、楽しみ方でしょうか。

こうして各々が感じる喜びを、次代へと伝えていくことが大切です。

また一方では、育成にあたる者がこの世界を楽しんでいない限り、この世に生きる喜び、陽気ぐらしに向かう喜びは、子供たちに伝わっていかないと思います。それでは、感謝の心を育めなくなってしまうのではないのでしょうか。

だから、教えを伝える側のわれわれがしっかり親神様の御守護に感謝して、お道の教えによってこの世界に生きることを楽しんでほしいのです。

陽気ぐらしを楽しめる人に

本日は縦の伝道について、私がい頃感じていることを、3つに分けてお伝えしました。

1つ目は「育成者の心が子供の心を育てる」、育成者の心次第で子供は大きく伸びていくということ。育成者の心の成人が大切なんだ、ということですよ。

2つ目は「親神様は、私たちの人間の成長を何より喜んでくださる」ということ。人間でも我が子の成長が嬉しいのですから、親神様はもっとお喜びに違いない。だから大変だろうが、根気強く育成に励んでいこうということです。

3つ目が「先を楽しみに通る」ということ。今が辛くても大丈夫であるがままを楽しんで歩みましょう。先を楽しんで通りますよ。私たちが感謝の心をもたずして、子供たちにその喜びは伝わらないということですよ。

どうかこれからも、子供たちにはお道の信仰の喜びを伝えながら、陽気ぐらしの楽しめる、陽気な人となれるよう、親子共々陽気に、歩ませていただきますように。

(文責 編集部)

五月月次祭 祭典役割

祭主	扈者	扈者	座りつとめ	前	後	献饌長
大教会長	竹内義忠	山田道弘	大教会長 瀧本眞二郎 今川政治 会長夫人 前会長夫人 井筒ちぐさ	奥田眞治 岩切正義 木村真次 岩切孝子 山田秀子 竹内淳子	樋川泰士 村田光伸 宗我道明 山本広子 中村寿々代 石川石美	瀧本眞二郎
指図方	賛者	賛者	前	望月慶太	岡本久昭	奥田正徳
奥田正徳	川畑澄博	山本義範	瀧本義之	西本義和	吉田裕樹	湯川正信
岩切正教	石川健郎	河端芳雄	岩切正教	岩切正教	岩切正教	岩切正教
井筒文夫	河端芳雄	奥田正儀	井筒文夫	井筒文夫	井筒文夫	井筒文夫
守田清一	瀧本庄司	西本興正	守田清一	守田清一	守田清一	守田清一
山本義範	中村俊和	榎本康紀	山本義範	山本義範	山本義範	山本義範
井筒敏成	立花善三	湯川正信	井筒敏成	井筒敏成	井筒敏成	井筒敏成
岡本たねよ	宗我邦代	奥田千品	岡本たねよ	岡本たねよ	岡本たねよ	岡本たねよ
中村美津代	河合遊喜恵	湯川照代	中村美津代	中村美津代	中村美津代	中村美津代
岡島きよの	梶川りよ子	花岡由紀子	岡島きよの	岡島きよの	岡島きよの	岡島きよの
加藤義仁	久米大彦	山田幸一	加藤義仁	加藤義仁	加藤義仁	加藤義仁

青年会総会開催

5月31日、青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、青年会本部より宇恵道明委員をお迎えし、総会を開催した。

午前10時、井筒委員長が祭文を奏上。続いて、女子青年・女子会の協力のもと、14交替でおつとめを勤めた。

続く式典では、青年会長様からのビデオメッセージを拝聴。「心を澄ます毎日を」との基本方針のもと、「全世界に、おたすけを通してかしまの・かりものの教えを伝



総会式典、青年会本部・宇恵委員のお話

える」というビジョンが示された。

続いて宇恵委員が、「このビジョンに向かうためには、まず自分自身がかりもの・かりものの教えを中心に治め、十全の守護、八つのほこりの教えを意識して、心を澄ます毎日を送ることが大切」と話され、さらに、「一人が一人のおたすけ相手を」「教えに触れる機会をつくる」「ひのきしんの実践」との活動目標について詳しく話された。

次に大教会長が祝辞。「教会は陽気ぐらしの雰囲気満ちているかが大切で、そのために自分は教会に何ができるのかを、よく考えて行動してほしい」と述べられた。

最後に井筒委員長が挨拶。10月27日に開催される第100回記念総会には「おたすけ願」を活用して、誰かのたすかりを願っておちばへ帰るよう促した。

式典後は、女子青年・女子会と共に参道で直会。バーベキューを楽しみながら、ビンゴ大会などで大いに盛り上がった。

参加者は青年会員11名、OB4名、女子青年・女子会44名、計159

名であった。

またこの日、新たな常任委員が任命され、新委員会が発足した。

委員長 井筒敏成

副委員長 松森誠太・奥野善龍

委員 望月慶太・吉田充人

濱田慶郎・加藤 聡

大西直喜 加藤 仁

中神 走・奥 文也

北村真彦・坂井央人

山田元喜・岩切大成

井筒春来・竹内一天

原田成人・八木淳成

加世田元・井筒真彦

女子青年の集い開催

婦人会女子青年（岩切寿代委員長）は、5月31日、青年会総会に合わせ「女子青年の集い」を開催し、女子青年・女子会44名が参加した。

青年会総会のおつとめで女鳴物を勤めた後、記念写真を撮影し、陽気ホールに移動して式典。

婦人会本部からのご祝辞の後、井筒年子・婦人会芦津支部長のお話。おつとめの大切さを分かりや

すく話され、「教理を学び、友達にも勧めてほしい」と冊子「教えをもとに」を紹介された。

続いて岩切委員長が挨拶。「心の成人につとめ、教祖にお喜びいただけるようつとめてまいりましょう」と話し、最後に「11月1日の女子青年大会へは友達を誘って大勢で参加しましょう」と呼びかけた。

その後、奥田涼子さん（直轄）による新入会員入会宣言の後、常任委員の紹介。続いて、木村里香さん（若明德）、山下桃花さん（芦山都）の2名が感話を行った。



井筒年子・婦人会支部長のお話



学生参拝デー&新入生歓迎会

5月24日、芦津学生会（毛利祐太委員長）は、学生参拝デーに併せて新入生歓迎会を実施。高校生7名、大学生・専門学校生8名、学生担当委員10名が参加した。

本部神殿に集まった参加者に対して、毛利委員長が「今日は仲間と一緒に楽しい一日にしましょう」と挨拶。おつとめを勤めた後、西回廊で回廊ひのきしんを行った。

その後、詰所に移動した参加者は、交流ゲームなどで4班に分かれ、食堂でたこ焼きパーティー。新入生6名を含む

む全員が一人ずつ自己紹介を行い、楽しい時間を過ごした。

事情はこび

立教189年5月26日お許し
真伯教会

任命

二代会長

岡本たねよ

68歳



昭和51年おさづけの理拝戴、55年天理大学卒業、修養科第48期修了、教会長資格検

定合格、56年教人登録。平成14年に渡伯、真伯教会初代会長夫人として教会を支える。

創立30周年記念祭

就任奉告祭

立教189年7月5日

恒例祭日変更

月次祭

本年7月に限り4日

教務部報

教養掛（5月）

主任

高馬 三博

教養掛

川畑 正博・瀧本 美奈

教人登録

下笠由美香（大 島）

立教189年4月16日

おさづけの理拝戴（4月）

川脇 敏宏（有田港）

川脇 鈴奈（有田港）

洪 善武（真明彰化）

方 金台（真明彰化）

袁 季花（真明彰化）

黄 耀徳（真明彰化）

〔拝戴日順 6名〕

初席（4月）

（7名）真明彰化

（1名）名瀬港

〔順序運びより 8名〕

〔1月〕

（1名）芦金久

※記載漏れがありました

学生生徒修養会・高校の部

8月9日～13日（4泊5日）

内容：講話、グループワーク、レクリエーション

受講御供：10,000円 申込締切：7月25日

※詳細は学生担当委員会（木村・奥田）まで

月例統計（自令和8年1月1日～至令和8年4月30日）

項目 名称 ()内教会数	初席	のおさづけ の理拝戴	修養科修了	教人
大 教 会 (1)	1	1		
東 津 野 川 島 日 稗 本 日 始 津 門 當 大 沖 尼 四 ツ 大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
東 津 野 川 島 日 稗 本 日 始 津 門 當 大 沖 尼 四 ツ 大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯		2	2	3
吉 野 川 原 方 島 津 高 良 和 司 別 島 纒 崎 山 冠 下 山 保 木 浪 邊 華 津 江 野 周 明 島 洲 郷 勇 道 東 鎮 本 徳 彰 化 氣 照 伯	2	2	2	
島 原 方 島 津 高 良 和 司 別 島 纒 崎 山 冠 下 山 保 木 浪 邊 華 津 江 野 周 明 島 洲 郷 勇 道 東 鎮 本 徳 彰 化 氣 照 伯	2	2		
日 稗 本 日 始 津 門 當 大 沖 尼 四 ツ 大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	1	1		
本 日 始 津 門 當 大 沖 尼 四 ツ 大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
始 津 門 當 大 沖 尼 四 ツ 大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯		1	3	1
大 沖 尼 四 ツ 大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	4	5		2
尼 四 ツ 大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	2	1		
四 ツ 大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	2			
大 島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
島 天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
天 保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
保 青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
青 芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
芦 甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	1			
甲 芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯		1		
芦 天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
天 入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	4			
入 豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
豊 紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
紀 勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
勝 神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
神 の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
の 兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
兵 庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
庫 芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	1			
芦 ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
ノ 本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
本 明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
明 明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
明 道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
道 明 東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
東 和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
和 鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
鎮 神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	1			
神 滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
滝 明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
明 徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
徳 芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
芦 明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯	8	5		
明 彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
彰 化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
化 真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
真 明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
明 彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
彰 化 本 氣 明 照 真 伯				
化 本 氣 明 照 真 伯				
本 氣 明 照 真 伯				
氣 明 照 真 伯				
明 照 真 伯				
照 真 伯				
真 伯				
伯				
合 計 (209)	28	22	6	6